

人間再発掘シリーズ



5度目の五輪を目指す重量挙げエース
三宅宏実の「いま」

【デイリースポーツ制定「ホワイト・ベアスポーツ賞」受賞者編】

取材中、三宅宏実(33歳いちご)は同じフレーズを何度か口にした。

「飛び込んでみました」

リオデジャネイロ五輪が終わり、現役として東京五輪を目指そうと決断したが、そこがゴールになるだけではなく、その先、自分に何が残っているかを熟考した結果「大学院で

「やるならメダルを目指せ」初めて見た父の厳しい顔

勉強する環境に飛び込んでみました」と言う。恐らく、勇気を持ってチャレンジする自分を励ますには、「飛び込もう」という言葉が合うのだ。それにしても14歳で、父、伯父のオリンピックメダリスト、全国大会で活躍する兄たちがすでに始めていた重量挙げに「飛び込んだ」勇氣は、どれほど大きなものだっただろう。

兄を通じて、父・義行と母・育代に競技を始める意向は伝わったが、義行は手を貸さなかった。当初は、「冗談だろう」と考え、一方で娘の本気度を確認していた。

3カ月間ほど何も言われませんでした。小さい頃から見てイメージはできていたはずでしたが、何より分かっていなかったのが重さでした。地面にある大きな鉄の塊を持ち上げる重量に実感がありませんでしたね

バーベルの重りが付いていないシヤフト15キさえ、本当に重く感じられ不安にかられた。

母・育代は「無理に音大に進むより別の夢が生まれたなら」と、ピアノの「師弟関係」の発展的解消をし娘を後押ししてくれた。

父・義行の勤務する自衛隊体育学校で初めて練習をさせてもらい、ベルの高い選手たちと間近に触れあい、宏実の思いは一層強くなっていた。新たな師弟関係を築く父は、それを待っていたかのように声をかけた。技術の指導ではなく、2つの約束である。

父・義行がコーチとなった



父・義行がコーチとなった

「絶対に途中で投げ出さない。それは許さないよ。もうひとつは、やるならメダルを目指してトレーニングをするんだぞ」

初めて目にした、アスリートとしての父の厳しい顔、与えられた高い目標だった。コーチとなる父からの厳しい言葉だったが、不思議と自然に受け入れられたのは、自分の隣に夢が見つかったのと同じように、隣に、目標となる憧れのオリンピックがいた日常に心から感謝できたからだ。

「女の子にづらい思いをさせたくない」と、決して誘わなかった競技に飛び込んできた娘のため、義行は自衛官を退任し、まだメダルを獲得した歴史のない女子選手の指導に専念しようと考えた。

義行はメダルを仕舞(しま)っていた。娘にメダルを見たいとせがまれると「メダルは見るものではなく、獲るものだ」と言った。母も、少し大がかりではあるがピアノを仕舞った。「それでもいつかピアノを弾く日が戻ってくるかも」(育代)と淡い期待を抱きながら。

グランドピアノは「今も特別な倉庫に仕舞っています」と、育代は笑った。

敬称略

▲紙面編集▼和田 康志